

訪片嶺君于城北池田村即吟 岡田月艇

半日訪君出熊城，霜林欲染晚秋暎。床間偶有靈芝在，云是今年庭樹生。已對奇艸懷奇意，何知貴門示禎祥。

(未完)

秋郊途上

宮川生

流水斷橋路幾又，吟行到處夕陽斜。秋郊却勝春郊好，淡紫濃黃種々花。

某氏書齋新築告竣工因賦

新書樓在水之隈，滿目風光真美哉。鋤草栽花經世手，呼童貯酒濟時才。龍田山下探紅葉，泰勝寺邊踏碧苔。此際恰宜弄秋色，幾回曳杖度崔嵬。琴書悟了靜中緣，身在明窓淨几邊。栽遍滿園花萬種，主人日夕對花眠。

秋日閑居

汲取冷泉手自烹，閑來又愛小園芳。牽牛花是隣家種，分與秋光到我莊。

清雅可掬三四想看頗妙

芝庭片嶺忠拜批

別後寄友人

無名子

知友南歸別恨新，憑誰更約水魚親。他鄉他日若相遇，莫做尋常行路人。

舟過天草洋

晚烟漠々水禽啼，天草洋中望轉迷。波浪激時風亦激，鳥肩影冷夕陽西。

咏史

殺氣蒙蒙起薩邊九州草木馬蹄穿應憐蓋世英雄骨永消城山一片烟

批評

『イルペンセロンを讀む』を讀みて

孤影

氣内に溢れて、詞之を外に發す、人之を稱して文章といふ。氣内に溢れて出で來りたるものにあらずんば文章といふべからざるなり。只口之を唱へ、筆之を記さば、是文字の行列のみ、紙上の黒形のみ、何ぞ文といはん、何ぞ章といはん。若し夫れ彫琢を事とし、徒らに金玉を羅列せば、たとへ字は風霜を挾み篇は月露を連ぬと雖も何の要をかなさん。蓋生意を缺けばなり。惟其氣内に溢る、於是乎生意あり。惟其生意あり於是乎出沒變現あるは濤を驅り雲を湧かし、あるは地を抜き天に倚る、時には汨々として萬斛の泉源窮りなきが如く、時には滔々一瀉千里大海の潮の如く、純なるものは益々純に、清なるものは益々清に、美なるものは益々美なり。あらず、たとへその人文を行ふの道を知らずと雖も、その文中に發露する熱意は人をして、感せしめ、悲しましめ、またよく泣かしむ。人は無邪氣なる嬰兒の叫聲が、よくその母をして苦痛の局處を覺らしむることを知らずや。之を要するに文章は熱誠ならざる可らず、眞摯ならざる可らず、胸臆の奥底より來らざる可らず。余輩常にこの種の文を好み、一も此くの如きものに遇へば、反覆誦讀一は以て記者の心情を察し、一は以て己が修養練磨の參考とす。本誌五十號收むる所の文、多くは眞摯熱誠胸臆の奥底より來れるもの。中に一篇の感慨文あり、題して『イルペンセロンを讀む』といふ。今之を讀み、記者の意向を察し、併せて己れが之に對する意見を吐露せんとす。蓋この篇尤も余輩の注意を惹きたればなり。

題して『イルペンセロンを讀む』といふ。之を讀んで著者の意向を察し、己れが意見を陳述したるもの